

東神苑

東神苑は、石と水を巧みに使用することで有名な明治時代（1868 年～1912）の名作庭士、七代目小川治兵衛が設計を手掛けた平安神宮の三庭園のうちの三つ目のものです。四つある平安神宮の神苑で最大のもので、京都御所にあったものを移築した泰平閣などの美しい建造物があります。

東神苑は、江戸時代（1603～1867）の大名庭園に着想を得ています。大名は江戸時代における各地域の統治者で、大名庭園は規模も大きく、庭を眺める茶室などの建造物で構成されており、自らの力や富を象徴しています。

東神苑は大きな池を中心にデザインされており、その大きさにより広がりを持たせるため、庭園の外の風景を織り込んだ「借景」と呼ばれる手法を用いています。池にかかった屋根のある橋である「泰平閣」の向こうには、背景に山が見えます。「借景」は、日本特有の作庭手法の一つです。

池の周囲の園路沿いには桜の木が植えられ、一部の八重枝垂桜は、池の上へとその枝を伸ばしています。この庭園には、藤や、ツツジ、毎年 7 月に一日だけ繊細な青い花を咲かせるツユクサ(*tsuyukusa*; *Commelina communis*) などが植えられています。

東神苑を含む、平安神宮の神苑では、サギや、カワセミ、メジロ、シジュウカラなど、様々な鳥を観察することができます。